少しスペイン語が話せれば

元　TARO ファーム ケア クリニック 獣医師　大音　光生

JICAの長期専門家として派遣されると、着任直後は現地のホテルが仮住まいとなることがほとんどだが、家族随伴で赴任する場合、その借り住まい期間がなかなか大変である。着任当初は専門家本人よりも随伴した家族の方が遥かに苦労が多い。携行した多くの荷物は室内に山積みにして、ほとんど開梱出来ない。現地の事情はよく分からないので、子連れでの買い物や食事などはまず不可能。赴任地によっては言葉も現地語しか通じないかもしれない。旦那（専門家本人）は赴任地に到着した翌日には、JICAプロジェクトのリーダーや業務調整員と共に関係機関へ赴任の挨拶に行くのが通例である。当然のことながら、その後は毎日出勤する。旦那が出勤してしまうと、夕方帰って来るまで奥さんと子どもはどう過ごせばよいのやら、途方の暮れてしまうのも容易に想像が出来る。

私の場合、中国へ派遣される時は子どもらがまだ小さく（長男２歳７ヶ月、次男４ヶ月）、先ずは私が単身で中国（天津）に赴任し、住まいを決め、ある程度周辺事情を把握した（つもりになった？）赴任３ヶ月後に家族を呼び寄せた。と言っても、長男２歳10ヶ月で次男は７ヶ月。朝、私が出勤してから夕方帰宅するまで、妻は二人の幼子と共に住まいであるマンションの一室で、あるいはマンション周辺で過ごすしかなかったので、妻には相当なストレスをかけてしまった。今更ではあるが、妻にはお詫びと感謝の気持ちでいっぱいである。

タイ（バンコク）へ派遣される時は家族全員で同時派遣であった。当時、長男は５歳で次男は３歳。赴任直後からホテルの室内で二人で仲良く遊ぶことが多く（もちろん喧嘩をすることもあったが）、年齢の近い兄弟は「良き友だち」でもあり、中国に家族を呼び寄せた時とは子どもたちの状況が大きく異なった。仕事の合間を縫って住まい探しと子どもの幼稚園探しをしたが、やはり在留邦人の多いバンコクは凄いと思った。日本人が生活するためのサービスや施設が整っているだけではなく情報も豊富で、家族で安全に快適に住めそうなマンションと子どもたちがのびのびと過ごせそうな幼稚園をわりと早く決めることが出来た。

３度目の家族随伴での派遣となったボリビア（サンタクルス）へ赴任した時、長男は小学３年生で次男は小学１年生。今回は子どもたちの学校のことがあったので、過去２回の家族随伴とはまた違った苦労があった。実は犬（トイプードル）も一緒にボリビアへ行った。赴任直後はホテル住まいだったため、犬は現地の動物病院に一旦は預けた。しかし直ぐに、一軒家に住んでいるJICAプロジェクトの専門家が一時的に預かってくれることになり、とてもありがたかった。ボリビアのサンタクルスには日本人学校はないので、学校探しの前に子どもたちは先ず英語のプライベートレッスンから始めた。結果的に長男は１学年落として英語教育を行っている学園の小学校へ入学し、次男は同学園の幼稚園へ入園した。次男は卒園後、スペイン語教育をしている小学校に入学し、私と妻は英語とスペイン語の両方で四苦八苦することになるのだが。一方、家は犬が飼えることが条件だったので一軒家に住むことにした（住み始めて10ヶ月後、犬は自分で庭のフェンスの下に穴を掘って脱走し、行方不明に）。

今回のチリ（バルデビア）への派遣は私自身も想定外だったが、恐らく現地のJICAプロジェクト関係者も驚きの「子連れ（父と９歳の息子で）赴任」となった。チリに着いてから私のJICA専門家としてのスケジュールが全て異例と言うか、前例がないと言うか。

まさか９歳（小学４年生）の息子を一人ホテルに残して私が１日中出歩く訳にもゆかず、しばらくの間は私の行動全てに「９歳の息子同伴」となった。首都サンティアゴの日本大使館やJICAチリ事務所への挨拶は勿論のこと、赴任地バルデビアでのJICAプロジェクトのサイトや大学の獣医学部や繁殖学教室への訪問も全て息子同伴で出掛けて行った。どこへ行っても訪問先で息子は、「あなたはお父さんと一緒にチリまで来たんだ。お母さんやお兄ちゃんとは離れてしまうけど、よく来たねえ。すごいね。」というようなことを言われ、本人は照れながらも、少し誇らしげな顔をしていた。

夏の週末にバルデビア郊外を走るSL（蒸気機関車）　出発前に、機関車の先端に乗っかって記念写真を撮ることもOK！

採卵後に回収液を大学の研究室に持ち帰り、検卵を行う筆者（手前）とチリ人のM獣医師（奥：彼が採卵を行った）

確かに、「父と９歳の息子」２人でのチリ赴任は「本当に大丈夫なの？」と心配する周りからの声もそれなりにあった。但し、今回のチリ赴任に関しては、今までのJICA専門家としての海外赴任とは大きく異なる点がひとつあった。それは派遣先の国の使われている言葉が未知の言語ではないということだ。つまりスペイン語を私も息子もある程度は理解が出来る。ボリビアでの２年間、私は仕事で、息子は学校でスペイン語の中で過ごした。ボリビアから帰国して僅か１年で再びスペイン語を公用語とするチリへの赴任。ボリビアでそれなりに身についたスペイン語はまだまだ頭に残っている。チリに行けば更にスペイン語は甦るだろうという希望的な思いもあった。

チリに着いた時はまだ不安の方が大きかったが、赴任地バルデビアに着いてからは「全く知らない」と「少し知っている」がこれ程違うのかを色々な場面で感じた。先ずは子どもの学校のことだが、実はチリ派遣前に、JICAチリ酪農プロジェクトの専門家（業務調整員）に「９歳の息子が現地のスペイン語の学校への入学を希望している」ということを伝えておいた。そうしたらなんと、プロジェクトの秘書（ローカルスタッフのチリ人女性）が日本人の男の子が入学するにふさわしい学校を選んでくれていた。更に驚いたのは、彼女がその学校の教務主任の先生に息子の事情（ボリビアで現地の学校通っていてスペイン語はある程度理解出来て、チリでもスペイン語の学校に通いたい）を話してくれていたとのこと。赴任地バルデビアに着いた３日後、2002年10月10日（この日は木曜日）に学校に行き、いきなり教務主任、保護者（私）、児童（息子）の「三者面談」となった。もちろんスペイン語で。私も息子も一生懸命スペイン語で話した。週明けの月曜日には入学許可が出て、翌日の火曜日（10月15日）には初登校。午後、息子を迎えに行ったら、何人かの同級生が日本語で「サヨナラ」と言っていたのにはびっくりした（あの子たちはそもそも日本語の挨拶言葉を知っていたのだろうか？）。

スペイン語が分かればプライベートも楽しくなる。夏の週末にバルデビア郊外をSL（蒸気機関車）が走ることを知った。プロジェクトの日本人専門家から乗車券を販売している場所さえ教えてもらえば、あとは自分でSLの乗車券販売所へ行き、乗車日と枚数を言って切符を買えばいい。出発時刻も確認して、ついでにいつまで走っているのかも聞いておいた（日本では乗る機会がほぼないので、チリで２回乗った）。

業務面でのことを書くスペースがほとんどなくなってしまった。JICAの集団コースで受精卵移植コースに参加していたM獣医師は、私が家畜改良センターの海外研修施設に勤務している時にとても親しくなった研修生の一人だ。彼はとても勉強熱心で技術も高く、チリでの私の活動の右腕的存在となった。今でもSNSで繋がっている（はずだが？ 笑）。